TIFA 機関誌　VOL.48　2020.3.15 発行
Takarazuka International Friendship Association
編集：(特)宝塚市国際交流協会　広報委員会

年間テーマ「令和時代の国際交流を考える」

オーストリア国家公認ガイド、イップ常子氏による第１回国際理解講演会風景

目　　次

TIFA のこれから…… 2
令和時代の国際交流を考える…… 3
宝塚市姉妹都市提携周年行事…… 6
25 周年行事から学んだこと…… 8
スリランカ・サマンタ公使から…… 11
TAKARA っ子　楽しいピアノ教室…… 12
語らいの場…… 14
バングラディシュ ・ TIFA インフォメーション…… 16

発展するバングラディシュ

「コンニチハ！　オゲンキデスカ？」 キラキラした瞳をもつ子どもたちの歓迎を受けました。 写真は宝塚市に本部を置く NGO「日本はアジアの国々と共に」(JAC) 理事長の大口忠男さん・十四子さんご夫妻が創設した、日本バングラデシュ友好・ジョブラ・ウメシュ中等学校です。

バングラデシュ人民共和国はインドの東側、ベンガル湾に面し北海道２個分ほどの国で、人口は１億６千万人強。国民の 88%がイスラム教徒。アジアいちの親日国で、日本人というとフレンドリーに接してくれます。

1971 年にパキスタンから独立後、まっ先に国家承認したのが日本で、財政支援と技術協力を続けてきたことに、こちらが恐縮するほど恩義を感じてくれています。

４年前に学校が建ったジョブラ村は、この国第二の都市チッタゴンの外れにある仏教徒の住む農村にあり、水道もガスもなく、生活用水は井戸と溜め池、病院もなく、頻繁に停電し、扇風機が止まるとうだるような蒸し暑さ！(泣)。先生方と話したり、村びと宅を訪ねて、学校に寝泊まりしながら６日間過ごしました。とにかく子どもが多い。貧しくて義務教育さえ受けられない子もいます。学校を離れるときには心のこもったお別れ会を開いてくれました。

元中学校長の大口さんは、学力をつけさせ、この国で行われていない情操教育や体育、生活習慣など日本式の教育を取り入れて、国づくりに貢献する志や思いやりのある心、自立心をもった生徒を育てようと懸命です。

首都ダッカは、米、露、中国、印度からの資本による大型開発プロジェクトが進み建設ラッシュです。ヨーロッパ企業の進出も目立ちます。TV で目にするのは、豪華なリビング、洋装のベンガル美人、高級化粧品に歯磨き剤の CM であふれています。

国民の平均年齢 24 歳。実質 GDP 成長率は 7.9%と伸び盛りで 2018 年は世界５位です。10 年、いや５年もすれば、まちはすっかり様変わりしていることでしょう。そのときジョブラ村がどうなっているか。子どもたちの未来が明るいことを願って…。(寺本早苗)

T I F A　　インフォメーション

事 業 の ご 案 内

◎ 国際化や国際理解に関する資料・情報などの収集、交換と講演会、コンサートなどの開催
◎ 外国人来訪者向けのホームステイやホームビジットのシステムづくりと受け入れ
◎ 外国語の学習、翻訳、通訳・ガイドなどの活動
◎ 外国人が住みやすい街づくり支援や生活相談
◎ 外国人市民や海外の都市との交流の実施
◎ 毎月発行のニュースレターの監修と TIFA 機関誌の発行

募 集 し て い ま す

◎ 会員を募集しています。　　入会金不要
年会費　個人　2,000 円
　　団体　5,000 円　法人 10,000 円
◎ 外国からのお客様を受け入れていただくためのホストファミリーを募集しています
◎ 次回の機関誌 49 号への皆様の投稿をお待ちしています。 ホームステイや海外での体験や身近な国際交流にまつわる出来事など 700 字ぐらいでどんどんお寄せ下さい

★ 編 集 後 記 ★

“初春の令月にして気淑く風和らぎ”“梅の季節にようやく初稿が出来上がった。果たして皆さんにテーマの意図が伝わっていますでしょうか？

★ 編 集 委 員 ★

石原美生子　奥田啓子　加藤啓子　寺本早苗
徳田潤　春井美保子　福家清美　山本敬子

発行者　特定非営利活動法人　宝塚市国際交流協会 (TIFA)
〒665-0011 兵庫県宝塚市南口２丁目１４番１-３号　宝塚市立国際・文化センター内
Tel：0797-76-5917　Fax：0797-76-5918　URL: http://www.tifa.be/　E-mail:tifa@jttk.zaq.ne.jp
～無断転載を禁じます～

TIFAのこれからと視座

理事長　　加藤 啓子

宝塚市国際交流協会は昨年度創立 30 周年を迎え、様々な記念事業を行い多数の市民の皆さまがご参加くださり、当協会の国際交流、国際理解事業に共感と関心を持っていただきました。

記念事業については今回の 48 号の紙面で詳細をご報告させていただきます。創立 31 年目となる令和に発行いたします機関誌 48 号のテーマを「令和時代の国際交流を考える」といたしました。

TIFA のこれからを考えてゆきたいと思います。
国際交流協会は外国人住民が地域社会の構成員としてともに生きていくための多文化共生のまちづくりに取り組む組織としての役割を担っていますが、日本における在住外国人の増加傾向が続く中、取り組むべき課題は複雑化し、このように複雑化した課題にきめ細やかに対応するにはボランティアの会員だけでは限界があります。

これからの TIFA 活動には市行政、NGO/NPO など複数のセクターとのより一層の情報そして将来的なビジョンの共有と連携が重要だと考えています。

国際交流とは成果が即座に表れるものではありません。
TIFA では情報収集、発信し、国際理解の普及に務める広報、宝塚市が提携をしている姉妹都市からの来宝者や外国人市民、留学生との相互親睦を行う交流、市内の NGO 諸団体との相互協力の促進を図る国際協力、外国語コミュニケーション教室の企画、運営をする事業企画、異文化間生活相談、日本語を母語としない外国人に対して日本語学習を支援する日本語学習の 6 つの委員会が行政に代わって事業を展開しています。

上記事業は使命感と責任感を持って、ボランティアが当たっていますが、この多種多様な事業を令和の時代に引継ぐだけでなく、必要且つ重要な組織として、地域社会のみならず、他団体の先進的存在として認知される事業展開が求められています。

従来通りの企画、運営を踏襲するのではなく、外国人住民や国際交流に関心のある一般住民が気軽に参画できる企画、運営などを積極的に取り入れることが令和時代に求められる国際交流ではないでしょうか？

令和時代の国際交流を考える

令和時代の「国際交流協会」の役割

奥田 啓子

宝塚市国際交流協会は 1988 年設立され姉妹都市交流の原点がここにあり、姉妹都市交流を通して民間外交いわゆる民際外交を推進して、日本が世界に進出していく、それは日本が経済成長著しい華々しい時代の時であることと重ねていったわけです。又その時代での国際化という役割も大きいものがありました。しかし一方で、それは国際交流に興味関心のある趣味の世界と見られがちで、英語のできる人、海外生活の経験者など、お金と時間に余裕のある人たちの活動という風に見られがちでした。

バブル経済がはじけ、1997 年阪神大震災を経験し、2008 年日本経済がリーマンショックの影響を受け、さらに、2011 年に東日本大震災があり、さらに近年では災害被害が多く続きました。

社会環境に大きな変化があり、今日的「国際交流協会」の役割にも推移があります。

1990 年入管法が改正されていわゆる日系人の入国が増加し、当初の出稼ぎ労働者から 20 年余りを経過して宝塚市にも外国人定住者としての存在が顕著に見られるようになりました。

このような変化の中、我々協会は異文化理解、多文化共生を標榜しながら、どれほど外国人の生活に思いを寄せているのでしょうか。地域に住む市民としていかに共生しているのかを検証しなければならない時期だと思います。異文化を認め合うだけでは外国人の生活環境は変わりません。外国人労働者が消費される現状を改善していく我々日本人市民の理解と支援が必要です。外国人の人間としての権利の問題です。協会は政治にかかわる事は出来ませんが、協会員が現状を知り民間で支援できることを積極的に関わっていかなければ、自己満足的な活動になりがちです。

政府は移民を認めないと言い、一方で昨年度から大幅な外国人労働者受け入れを決定し、政策は着々と実行に移されています。兵庫県は政府の指針を受けて外国人受け入れ施策を打ち出し、各地方団体と連携を図っています。文化庁資料によると、「生活者としての外国人」のための日本語教育の目標の中で①健康、安全に暮らす ②住居を確保する ③消費生活を行う ④目的地に移動する ⑤人と関わる ⑥社会の一員となる ⑦自身を豊かにする ⑧情報を収集する・発信する 等々を挙げています。これらの項目はすべて市民として、当然必要なことばかりです。外国人に対する人権を守るという視点がはっきりと打ち出されており、まさに更なる多文化共生推進への提唱です。

令和の時代はこれらの提唱を具現化していく時代となっています。具体的には、宝塚市国際交流協会においても今より更に協会の事業委員会同士が有機的に繋がり、事業活動に際しては、多文化共生という視点を共有しながら、我々市民ボランティアがきめ細やかに連携して地道に成果を上げていくことが重要と考えます。

以上、令和時代の当協会において、真の多文化共生に向けて、外国人支援を中心にした事業活動を更に深めていくことを提案する次第です。

（副理事長）

外国人を巡る諸問題

木原 正宣

2019 年 4 月に外国人の新たな在留資格「特定技能」ができました。人手不足が深刻な 14 業種で、外国人の単純労働に事実上、門戸を開いたことになります。この変更について、日経リサーチが世論調査を実施しましたが、その結果は以下のとおりです。外国人労働者の受け入れに関して、

「積極的に受け入れるべきだ」が 31%、「好ましくないが、仕方がない」が 50%で、合計で容認派は 80%に達しました。18～29 歳では、「積極的に受け入れるべきだ」が 48%にのぼりました。若い人たちの関心が高く、宝塚でも、外国人が着実に増えている実感があります。

さて、現下の日本を取り巻く問題の中で、「日韓関係の危機問題」は大変重要な問題ですが、解決方法が見当たらず、全く予測がたちません。

最近、韓国でベストセラーになり、日本でも翻訳版がでました、「反日種族主義―日韓危機の根源」という本を読みました。この本は、韓国での著名な経済学者である李栄薫氏が編者になり、錚錚たる学者たちが著述した、衝撃の歴史書です。現在の日韓の危機状態の根源である諸問題を、経済学者らしく、数字を駆使したわかりやすい説明となっています。この実証的な歴史書は、対立する立場の人々が議論できる共通の場を提供してくれるものだと考えます。　　（会計理事）

異文化理解？
スリは文化　in イタリア

藤本 由利子

昨年４月に「あっ！ どろぼう・ドロボウ」と、イヤホンから聞こえるガイドさんの叫び。指さした先には若くてステキな女性が振り向いてニッコリ！！「やあ！」と手を挙げる。私たち日本人は？！リユックのチャックを開けられた男性は勿論、雑踏の周りのイタリア人も何もなかったように歩いている。

イタリアではスリが多いと聞いてきたがミラノについて街を散策始めた途端、出会うとは！女性のガイドさんによると、イタリアでは「スリは文化」だと。スリはジプシー。でも今のジプシーは若い女性が多く、１日の稼ぎは５万から１０万。住民登録もなく住む家もないのに、高級スリは高級マンション住まい、シャネルのバッグを持ち優雅な暮らしとか。代々続く家柄（？）だそうだ。歳が行って稼ぎの無いジプシーは物乞いに。スリの言い分は命だけはその人のものだけど、お金や物は神から平等に与えられているので皆の物。人のものも、私のもの。従って盗みにはならないとか。警察も取り合わないらしい。

ローマでもやはり若い女性が５，６人の集団で指を鳴らし「チチチッチ、チチチッチ」と言いながらで引っ付いて来た。私達も警戒したので諦めて去っていった。でも不思議、男性のガイドは親しいようだった。その後もカップル組とか何回も遭遇したがその都度、彼らは平然と知らないふりで立ち去る。とうとう私の夫にも若い女性二人組が。すぐ気づいて振り返るとやはり悠然と歩いて立ち去った。　堂々としたスリ！　スリを認める、これも異文化理解なの？！　（国際協力委員長）

分かってもらう努力が必要

原田 永康

「阿呆！　まだこんな事も分からんのかボケ！・・・」と言われても、関西人なら何とかやり過ごせられますが、関東の人は深く傷つくと言われています。ましてや外国人の場合はどうでしょう？阿呆とかボケと言う言葉は辞書を引かないと分からないでしょうし、辞書を引けば酷い事が書いてあります！

日本人の親方が外国人労働者に言ったこの言葉が、愛のムチと言う言葉さえない外国人を深く傷つけ殺人にまで至るという不幸な事件もありました。昨今、街には外国人観光客が溢れ、飲食店の店員、職場にも外国人が増えて来ています。

宝塚に住んでいると今はあまり感じませんが、これから介護される身になると外国人の方にもお世話になる事になるでしょう。もちろん以心伝心と言うような事は通じませんし、何とか外国人の方と心が通じ合うようにするには、先ず心を開いて相手の文化を知ると同時に、日本の文化を分かってもらう必要があると思います。

そう、相手を分かってあげようとするだけでは無くて、自分たちの事も分かってもらう努力が必要で、それが本当の異文化交流ではないでしょうか？孫子の兵法『敵を知り、己を知らば・・』ではありませんが、『相手の文化を知り、自分の文化も相手に良く知らしめれば、皆平和に暮らせます』

世の中平和に暮らすには、異国間交流だけでなく、世代間、男女間、異宗教間など様々な交流が必要です。さあ元気なうちから異文化交流を始めましょう、TIFA はそのお手伝いをします。

（交流委員長）

TIFA 中長期的戦略の構築を

山中　光

残念ながら、TIFA には今後 5 年後、10 年後の将来あるべき姿を実現するための戦略が見当たらず、まずはこれを構築することが喫緊の課題であろう。

まず優先すべき課題としては、①会員数の伸び悩み、②役員、事業委員の高齢化、③組織の硬直化と事業のマンネリ化等が挙げられる。これらを解決する為には、TIFA の中長期的戦略の立案とそれに沿った具体的打ち手の遂行が不可欠である。

①　については、過去 5 年間のトレンドを把握することで課題を抽出し、今後の会員増に向けた「効果的な情報発信のあり方」や「会員の特典の強化策」等を徹底議論し、戦略の立案が急務である。

②　については、如何にして若手のボランティアが沢山参画してもらえるか、その為に委員会の開催日を社会人や大学生が参画しやすい土曜か日曜に設定する等、抜本的な対応策が必要だ。

③　については、組織と事業体系の総合的見直しが必要で、①、②の施策により委員会への若手の参画増で、活性化と戦力化がはかられ、新しい発想による新規事業の創出が期待される。

具体的には、TIFA の各委員会代表メンバー、そして願わくは行政の参画による合同チーム「国際交流 PJ2030(仮称)」を編成し、姉妹都市交流のあり方等も含めた諸テーマについて議論し、また TIFA 個人、団体、法人会員及び協力関係にある大学生参画も含めた NPO 団体等へのアンケート調査結果も参考に課題を浮き彫りにし、今後の打ち手を 1 年がかりで議論して、「国際交流に関する中長期的戦略」を策定してはどうだろうか、提案したい。　　（事業企画委員長）

令和時代の国際交流を考える

池田 三千代

国を越えて人々が他国へ行き来する流れは、全世界で日々進んでいます。

日本へも多くの国々から就職、結婚、留学で、また技能実習生、旅行者等として私達の身近な所に外国人が暮らす現状があります。

令和時代にはグローバル化は一層加速するでしょう。そこには個人ではどうにもならない国どうしの政治上、経済上の対立があるかもしれませんが、日常生活の場で実際に交流するのは一市民の私達一人一人です。

国の手の届き難い部分も含めて、そのような私達ができることという観点で今一度国際交流について考えてみました。

基本姿勢として「その人がどこの国の誰か」ではなく同じ人間として隣人、友人としてつきあう。

他国に暮らす人の気持ち、立場に思いを致し、こちらから求めるだけでなく、その人の国の文化や考え方を知ろうとし学ぼうとすれば、無知、無理解、誤解からくるすれ違いや争いを少しでも避けることができ、心を通わせることもできると思うのです。異国で自分の気持ちや現状を表現したり、助けを求める手立てとなるのは言葉です。日本語学習習得は重要な支援です。

この事業をより充実させると共に今以上、皆で楽しく自由に集える機会、相互文化交流イベント、レクリエーション等を増やし、その中でも言葉や新しい企画を考えながら、皆で力を合わせ、行動していけたらいいなと思っています。

（日本語学習委員長）

宝塚市姉妹都市提携周年行事

姉妹都市提携記念実行委員長　大世古 健治

宝塚市は令和元年(2019)、姉妹都市提携を結んでいるオーガスタ・リッチモンド郡と提携30周年を、そしてウィーン市第九区(アルザーグルンド)と提携25周年を迎えました。それを記念してＴＩＦＡは、市民レベルの交流活動を目的に実行委員会をたちあげて３つの事業を実施しました

①　ギャラリーで、5日間にわたる姉妹都市ウィーク
②　宝塚ホテルでコンサート【ウィーンの風にのって】
③　公式訪問　ウィーン市第九区(アルザーグルンド)へ

①　姉妹都市交流ウィーク　　展示担当　奥田 啓子

姉妹都市交流写真展（オーガスタ市/ウィーン市第九区）が、令和元年7月19日から23日まで宝塚市立国際・文化センターギャラリーで開催されました。
まずTIFAの国際交流活動30年のあゆみを紹介し、宝塚市、オーガスタ30周年およびウィーン25周年を記念し、調印式や当時の相互交流の状況等またウィーン市街等の懐かしい写真を展示し、楽しんで頂きました。またDVDでも調印式の模様を流しました。会場内ではおたのしみ抽選会を設け、T-シャツ、ボールペン、クリアファイル等の商品を持って帰って頂き喜んでもらいました。

姉妹都市交流ウィーク中の7月20日にウィーン市第九区姉妹都市提携 25 周年講演会が大阪産業大学名誉教授のリングホーファー・マンフレッド氏により「ウィーン市第九区へようこそ」と題して開催されました。前半はウィーンの歴史から始まり第九区の地理的説明を皮切りに名門ウィーン大学の話がありました。その後は第九区の行政、区長の紹介に続きレストラン、スーパーマーケツト、食文化の紹介が有り、伝統的な食品や飲み物等の興味深い話で皆の関心を集めました。具体的に多くの写真を使いウィーン旅行をする方にも参考になるお話しがたくさんありました。又、質問コーナーは30分以上にわたり具体的なウィーン市第九区の事柄に集中して和やかに興味深い時間が実現出来て双方の懇親に大いにプラスの時間が持てました。

7月21日には、日本・オーストリア友好150周年を記念して映画「オーストリア空と地から」の上映会が行なわれ、ウィーンファンや10月に予定のウィーン訪問の参加者など30名を超える方々が小ホールに集まりました。「オーストリア空と地から」はヨゼフ・フィルスマイヤー監督によるオーストリア各地の自然や街が空撮や地上カメラを駆使してとらえられ、フーベルト・フォン・ゴイゼルンによる映像と心にしみる音楽で、参加者の皆さんもスクリーンに魅了された様子でした。

その他にも事業企画委員会主催のウィーン映画上映会も加えられ、多くのプログラムが予定通り行われ、国際・文化センターのギャラリーや小ホールに市民が集い、姉妹都市交流ウィークは盛り上がって、令和時代への周年事業への橋渡しとなることを願いつつ閉会となりました。

②　プリンツ夫妻による"ウィーンの風にのって"　　コンサート担当　福家 清美

9月8日に宝塚ホテルで、ウィーン市在住のプリンツ夫妻の来宝15回目となる『ウィーンの風にのって』コンサートを、演奏グループ"赤とんぼ"とのコラボで開催しました。プリンツ夫妻の来宝は25年前の1994年8月に、宝塚ホテルでTIFA主催の、**「宝塚市制40周年記念　ふれあいウィーン文化デー」**を開催したときに演奏したのがきっかけです。2か月後、125名の宝塚市からのウィーン訪問団とともに、第九区のシューベルトの生家で調印式を、リヒテンターラー教会やウィーン市庁舎で合唱を催して以来のお付き合いです。

ウィーンにちなんだ曲で構成され、一部はプリンツ氏によるピアノ独奏でハイドンのソナタ。軽やかに時には激しくハイドンの世界に。夫人の中田留美子氏は、シューベルトのセレナーデとリストの愛の夢。お話しも素晴らしく、ウィーンの音楽事情が手に取るようです。2部は"赤とんぼ"の津田さんと迎さんの歌劇。魔笛のパパパの二重唱、舞台を飛び回る二人、山内さんと山本さんの連弾、運命。プリンツ夫妻のオペレッタ、"ジュディダ"は切なく甘くとろけるような歌声でした。全員のコラボ、ウィーン私の夢の街、うっとりしてウィーンの虜。最後に、おなじみのスミレの花咲くころを、全員で軽やかに華やかに宝塚らしく歌いました。この日の名取市への義援金は、総額45,693円になりました。

③　公式訪問　ウィーン市第九区(アルザーグルンド)　　城戸ますみ

10月3日、私達17名は関西空港10：45発フィンランド航空にて、ヘルシンキ経由ウィーンへ夕方に到着しました。そしてホテルメルキュールウエストバンホフで5泊致しました。

2日目はこの旅のメイン公式行事である第九区庁舎アルザーグルンドへの表敬訪問です。素敵にテーブルセッティングされたお部屋で、九区の若き女性サヤ・アーマド区長とTIFA加藤啓子理事長のご挨拶から始まった交流会は、宝塚市長からと区長からの親書の交換へと続きました。私達の自己紹介と和やかな懇談後日本舞踊も喜んで頂き、最後にお土産を交換し感謝を伝え友好を確認致しました。その後区内のフロイト公園で、25年前宝塚市から贈呈した植樹と記念碑を見学しました。午後からは市内観光で、国立歌劇場(オペラ座) や、ハプスブルク家の夏の宮殿シェーンブルン宮殿を見学し、壮大で華麗な建物にその歴史を見ることができました。

3日目の夜は、第九区内にある、宝塚市と姉妹都市になるきっかけとなった「フォルクスオーパー」にて観劇致しました。4日目はウィーンの西にあるメルク修道院へ。バロックの至宝といわれる華麗で立派な、マリーアントワネットも宿泊したお城のような修道院です。ドナウ川クルーズでは世界遺産ヴァッファウ渓谷を訪れました。崖の上の古城や葡萄のだんだん畑が美しく続き、しばしゆったりとした時間でした。

5日目はAWA社長の案内でハンガリーの侯爵家エスターハージー宮殿を訪れました。宮廷学長であった作曲家ハイドンの立派なミュージアムにも、かつてのハンガリー・オーストリア帝国の権力を感じました。ワインの醸造所見学と試飲を楽しみ、ワインの町ルストの街を散策し、コウノトリにも感激しました。6日目最終日のフリータイムは思い思いの観光とショッピングへ。私は是非行きたかったフンダードヴァッサーハウスのカラフルな曲線アート建築へ等々。各人がたっぷりウィーンを楽しみ、ウィーン19：15発ヘルシンキ経由にて翌10月9日の夕刻、関空に17名が無事に帰国。忘れられない友好の楽しい旅になったこと、皆様に感謝申し上げます。誇らしく嬉しく思う有意義な旅となりました。

姉妹都市提携 25 周年記念行事から学んだ事いろいろ

オーストリア国家公認ガイドの講演、ウィーン市第九区公式訪問、ウィーン市在住音楽家と宝塚の演奏家とのコラボ、ウィーン国立音楽大学教授によるピアノレッスンなど様々な経験をしました。その多彩なレポートの数々です。

エスターハージーのワイナリーはいかがでしたか？　AWA 社長　ノベルト・テッシュ

こんにちは。株式会社 AWA 代表取締役のノベルト・テッシュと申します。私はオーストリア出身で、日本には 1989 年から住んでいます。初めて TIFA を知ったのは、野田さんとの出会いがきっかけで、宝塚でオーストリアワイン会を一緒に開いてお客さんを紹介していただいたり、当時から大変お世話になりました。私はその頃はまだ日本語が上手く話せず、数ヶ月間 TIFA の日本語教室に通ったのもいい思い出です。

1994 年、宝塚市がウィーン第九区と姉妹都市関係になった年、私は有限会社 AWA を設立し、本格的にオーストリアワインの輸入を始めました。それを機に宝塚市との関わりがさらに深くなり、TIFA でワインセミナーや蜂蜜セミナーを開催させていただいたり、トークショーのためにオーストリア人の友人を紹介し、一緒に出演したりしました。

ウィーンとの姉妹都市提携 25 周年を迎えた 2019 年は、1 日という短い時間でしたが、ウィーンを訪れた皆さんにブルゲンラント州を案内しました。エスターハージー城とその中にあるハイドン・コンサートホールを見て、宮殿のレストランでランチを食べた後、エスターハージーのワイナリーを訪れました。ワイナリーではセラーの中まで見学し、たくさんの種類のワインを試飲。ほとんどの方にとっては初めての経験で、とても喜んでいただき、私にとっても嬉しい時間となりました。野田さんや加藤さん達とはプライベートでもずっと親交があり、時々ワイン会を開いて美味しいワインと会話を楽しんでいます。TIFA とはもう 20 年以上のお付き合いになりますが、こうして皆さんと知り合えたことに、とても感謝しています。

ぜひ TIFA の活動をもっと広く知っていただき、私がそうだったように、人生をさらに豊かにしてくれる人々や出来事と出会う方が増えたら素晴らしいなぁと思っています。

プリンツ夫妻とコラボ　ウィーンコンサートを終えて　赤とんぼ代表　津田 基子

宝塚市ウィーン市第九区姉妹都市提携 25 周年の記念すべきコンサートに友情出演という形で、私共演奏グループ“赤とんぼ”をお誘いくださり大変光栄に思っております。

今回もコンサートだけでなく、一連の交流イベントやセミナーの開催があり、そしてこれまで開催されてきた公演や親善の交流の模様など国際交流に尽力されてきた軌跡をお聞きするにつれ、本当に多くの方々の思いと力の結集、そして長らく続けてこられた活動には頭が下がりました。

この機会を頂き、コンサートでプリンツ夫妻と共演した喜びだけでなく、国境を越えた文化交流の素晴らしさを実感できましたことは、演奏グループ“赤とんぼ”にとりまして大きな収穫であったと感じ入ります。

演奏グループ“赤とんぼ”は、1983 年にこの宝塚の地で発足し、地域の文化向上とクラシック音楽の普及を目的とし活動を続けています。また、中国蘇州、上海での公演では日中文化交流に一役を担いました。近年は活動拠点を宝塚だけでなく西宮、伊丹、大阪へと広げていますが、その音楽でより多くの人々に心豊かな時間と暮らしを共有できたらと願っています。そして、その発信基地である宝塚が「音楽の街」として今後も発展するよう貢献できれば、この上ない喜びです。

この度のコンサートにおきまして、宝塚市国際交流協会、宝塚市文化財団、ならびにご尽力いただいた全ての関係者の皆様に紙面を借りて心より御礼申し上げます。感謝！

ウィーン旅行に 25 年ぶりに参加して　吉田 忠二

1994 年ウィーン市第九区との姉妹都市交流調印式に、TIFA（60 歳から 70 歳までお世話になった）国際協力委員長の資格で同行いたしました。2019 年に公報で今回のウィーン訪問の記事を見つけ、TIFA 事務局の歓迎も受けて 25 年ぶりに参加することにしました。ウィーンは 30 歳代にスイスに駐在していた間に車で 2 回ほど訪問し、定年退職後の 2004 年、中欧パック旅行でウィーンに立ち寄った機会に、フォルクスオパー、シュトラウスの喜歌劇「こうもり」を日本から予約して鑑賞しています。

そして今回、第九区役所公式訪問に同伴させてもらったほか、事務局のご担当の懇切な事前説明と資料もあって、楽しく効率的に観光出来ました。ヨーロッパでも屈指の城、シェーンブルンはじめエステルハジー城一帯、メルク修道院、フォルクスオパー「キャバレー」鑑賞、ヴァッハウ渓谷のクルーズがハイライトでした。イップ常子女史の行き届いた案内で市内とフンデルトワッサー村を見学できました。そのほか、国立歌劇場の内部見学、市立公園の散策、聖ペーター教会、市内の宝塚市交流記念碑、等々も印象深いものでした。

ベルベデーレ宮殿の別館、クリムト他の絵画展は思わぬ収穫で豪雨の中、訪問した甲斐がありました。食べ物では、グヤーシュ、シュニッツェル、モーツァルト球、ザッハートルテなど著名なものは、全て網羅でき、その他にもウエファースがウィーン名物菓子と知りました。

ウィーン旅行の思い出　棟田 佳緒理

ウィーンと言えば歴史、文化、グルメと誰もが引き付けられる魅力たっぷりの観光都市。そして「音楽の都」。

ウィーンフィルのニューイヤーコンサートは 90 カ国を超す世界各国に生放送されていて、私もその中継を楽しみにしている一人です。「せっかくウィーンに行くのだから是非あのコンサート会場の楽友協会を見てみたい！出来れば中に入ってみたい！」と調べると、唯一の自由行動の日に「ウィーンフィル定期演奏会」があるではないですか。八方手を尽くし、そのチケットを手に入れ、いざ出発。「黄金のホール」と呼ばれるホールは大変美しく、見るだけでも心が弾みます。席は上手のステージ上まで伸びたバルコニーの一列目。下をのぞくとティンパニが並んでいるのが見えます。頑張って取った割には隅っこの席ですが隣のご婦人が「ここは指揮者の顔が見えるでしょ。楽しい席よ」と教えてくれました。曲は指揮者ティーレマンお得意の「ブルックナー交響曲第 8 番」。ウィーンフィルの演奏技術が高いことはもちろん、音響の優れていることで有名なホール。演奏が始まるとやさしい響きでうっとりします。隣のご婦人の言う通り、席からは指揮者と演奏者が真っ赤な顔をしてけしかけ合ったり、にっこり微笑みあったりと、色々な掛け合いが良く見て取れます。こんな楽しみ方が出来るなんて、さすが「音楽の都」です。脱帽。今も思い出す度にあの時の興奮が蘇ります。

「さて、皆様。今度はいつ行きましょう？」

日本舞踊を披露して

伝統芸能に親しむ友の会　花柳 友章

私はあちらで日本舞踊を披露させて頂く為の渡欧でしたが大変な荷物の量でして帰途に捨てていくわけにもゆかず持参した着物以外に宝塚ホテルの 12 月８日のクリスマス舞踊のおみやげで重量がオーバーとなりカバンをオープンして空港でとっても恥ずかしい思いをしました。お助けいただいた方に今でも有難く感謝をしている次第です。

私は２度目のウィーンですが美しき青きドナウ川を下った時にステキな古城や盗賊の城などなつかしく思い出されます。

又、別の日の自由な日にウィーンの森へ下手なドイツ語と英語、日本語で地下鉄・バスを乗継ぎ片道２時間半かけて出かけました。立派でステキなエリザベートの墓所がありました。

私のウィーンと交流記

神戸女学院大講師　山内 鈴子

ウィーン屈指の音楽私立大学であるプライナー音楽院と神戸女学院大学音楽学部との交流コンサートを８年にわたり開催しております。交流の始まりは大学で教えていた生徒がウィーン留学後、プライナー音楽院で「コルペティ（伴奏法）」の教鞭をとっており、彼女の申し出によりこの企画が実現しました。

両校の学生同士の交流により意識高揚が図られるとの思いからです。日本の学生にとっては、ウィーンで単にレッスンを受けるだけではなく、ブラームスが演奏した歴史あるホールでのコンサートの出演により学んだ成果を表現し、その経験を経て更なる向上の糧となることを期待しております。

イップさんとの出会いは、数年前にブタペストへの小旅行のガイドをお願いした時からです。それ以降は、イップさんの魅力に惹かれて、ウィーンでのレッスンとコンサートの後の音楽に関した小旅行の素晴らしい企画とガイドをお願いし、参加者全員が満足して旅を終える事が出来ています。ハンガリーのリスト音楽院、ワーグナーのノインシュヴァイン城、ザルツブルグのモーツァルトの軌跡、ワルシャワのショパンの家、クロアチアへの旅、そして今年のベートーヴェンイヤーのウィーンからボンまでの道等、持ち前の博識と探求心で次々と提案をして頂き、全身全霊をもってご案内していただけるイップさんにはいつも感謝しております。

イップさんはお子様が手を離れてから、大変な努力をしてオーストリアの公認ガイドの資格を取得されて、主として日本人のガイドをしておられます。そして、その博識で、日本中を飛び回りウィーンとの交流を啓蒙する活動を行っておられます。宝塚でも講演されておられることはご高承の通りです。

ウィーンの歴史、特に、近年のハプスブルグ家の歴史とその時代背景及び広汎にわたる関連事象と、講演をお聞きするたびに思いもよらない事実を教えて頂き、驚きの連続です。

これからも、パワフルイップさんには元気で日本とオーストリアの架け橋としてご活躍をお祈りしております。

第２回国際理解講演会
「サマンタ P.K. ウィジェセーカラ公使に学ぶこと」

スリランカは 1983 年に勃発したタミル人過激派ゲリラ組織ＬＴＴＥ（タミル民族開放の虎）と政府軍の内戦開始から 26 年後の 2009 年５月、中国からの大量の武器供与により政府軍が勝利し、四半世紀を超える内戦状態に終止符を打った。

これは、スリランカにとって和平の始まりであると同時に、中国の習近平体制が推進する「 **一帯一路** 」構想に巻き込まれるきっかけともなった。内戦終結後、その立役者となったラジャパクサ大統領は英雄視され、独裁体制を敷くとともに中国との関係を強め、港湾、空港などのインフラ整備のための援助を中国に求めて、「 **一帯一路** 」に巻き込まれていくことになる。

2015 年の大統領選挙で反独裁政治を掲げたシリセーナ大統領誕生後は、中国寄りの外交姿勢を改め、インド、中国、日本との等距離外交に転換、国内的にも緊縮政策により前政権時代の修正を図ったが、道半ばの中で、昨秋の大統領選挙において、ラジャパクサ元大統領派が巻き返し、実弟が大統領になったことで、再び、中国寄りの外交路線に戻るのではないかとの懸念が生まれている。

このように、この 10 年間の動きを見ても、インド洋の小国（東北６県とほぼ同じ面積、人口約 2015 万人）ではあるが、国際政治の面からもまた日本との関係においても、目が離せない注目の国である。

サマンタ公使は、スリランカ商務省出身の外交官で通商担当として、ジュネーブ、ロンドン、チェンナイ等の勤務を経て、2017 年から在日スリランカ大使館の商務担当公使として、日本からの投資の促進や観光客の増加にも努力されている。

特に、観光については、観光立国を宣言し、経済の大きな柱の一つにしたいスリランカにとって、日本に期待するところが大きいが、現在のところ，slowly　increased であるとのこと、もっともっと大勢の日本人がスリランカに来て、その魅力に触れて欲しいとの思いをにじませていた。

観光資源の多様性があり、極めて親日的で居心地がいいこと、安全であることなどから、一度訪れた人がまた行きたい、という観光客のリピーター率が世界の観光国の中でトップになったこともあるスリランカは観光地としても注目の国である。因みに、スリランカへの旅行者のベストスリーは、英国、ドイツ、インドである。また、成田～コロンボのスリランカ航空のフライトは、現在の週４便から 2020 年には週６便に増便されるとの見通しであることも明かされた。このことからも日本への期待の大きさが窺える。

スリランカの主要産業は、繊維産業（縫製業）と紅茶、ココナッツ、ゴム等の農業分野それに宝石といったところであり、これに観光分野が加わりＧＤＰを大きく押し上げる力になることを期待したい。

日本スリランカ友の会関西会長　藤井 健三

宝塚市・ウィーン市第九区姉妹都市提携 25 周年記念
TAKARA っ子 楽しいピアノ教室によせて

宝塚市教育長 森 恵実子

このたび、宝塚市・ウィーン市第九区姉妹都市提携 25 周年記念 TAKARA っ子楽しいピアノ教室が開催されました。そのきっかけは、国際交流協会より平成 14 年（2002 年）にも一度開催されたことのある宝塚市教育委員会主催の音楽教室を開催してはどうかとのご提案をいただいたことからでした。姉妹都市提携 25 周年記念コンサートのため、ウィーン市在住のマインハルト・プリンツ教授が来日されることから、その前日に子どもたちへのピアノレッスンを実施するというものです。世界的なピアニストであるプリンツ教授のレッスンを宝塚の地で体験できるまたとないチャンスをいただいたことをきっかけに、国際交流協会のご協力をいただきながら開催に向けて進めてまいりました。

応募者は募集人数 8 名を大きく上回る 71 名。参加申込書には、「ピアノが好きだから、もっとうまくなりたい」「曲のイメージを深めて、もっと表現したい」など、子どもたちのレッスンへの抱負がたくさんあふれていました。

当日は、子どもたちの演奏を見守るようにプリンツ教授に指導していただいたことで、演奏が徐々に変化していく様子が手に取るようにわかりました。「宝塚市の子どもたちに本物の音楽にふれる機会を作ってあげたい」という思いを実現できたこと本当にうれしく思います。

最後になりますが、このような機会を与えていただいた宝塚市国際交流協会の加藤啓子理事長をはじめ、ご指導いただきましたマインハルト・プリンツ、中田留美子ご夫妻、当日までご尽力いただきました関係者のみなさますべてに感謝いたします。

TAKARA っ子 楽しいピアノ教室

～ ウィーン国立音楽大学プリンツ教授による
公開ピアノレッスン ～

日時　2019 年 9 月 7 日（土）14 時
場所　宝塚市立中央公民館
主催　宝塚市教育委員会
後援　宝塚市・（特）宝塚市国際交流協会

当日の公開ピアノレッスンの様子から

（出演者名（学年）　曲目　レッスンの内容）

子どもたちは自分で選んだ曲を演奏しました。会場のお客さんの前で演奏することから、どの子も緊張の面持ちで演奏していましたが、プリンツ教授は子どもたちを和ませるような優しい笑顔で寄り添いながらも、子どもたちの演奏の中から、曲のイメージをより表現できるよう、実際に演奏して見せるなど丁寧に指導していただきました。通訳と進行をしていただいた中田留美子さんも、子どもたちに、ひとつひとつ本当に丁寧に伝えていただきました。

（1）中路　佳恋さん　（小4）

「6つのウィーンソナチネⅠ 第4楽章」

様々なところで出てくる主題に対して、強弱をつけるように指導を受けたことでより音楽表現の深い演奏となりました。また、短調に転調した部分からのテンションの切り替えについて指導があり、長調と短調の差をよりつけられる演奏となりました。

（2）梶元　苺衣さん　（小3）　「風車」

最初の細かいパッセージに対して弱音からクレッシェンドをかけて音楽を作る指導を受け、表現の幅が広がる演奏となりました。最後のフレーズを演奏する直前の“間”について指導を受け、休符も音楽の一部分であるということを感じられる演奏にかわっていきました。

（3）ダディ 将太さん　（小2）

「アイルランドの歌」

左手の伴奏のバランスについて指導を受け、右手のメロディーとのバランスについて考えられる演奏になりました。休符の部分ではしっかりと指を鍵盤から上げることを教えてもらい、自信をもって指を離すことができるようになりました。

（4）玉置　実夢さん　（小5）

「舞曲「異国の風」」

音楽の雰囲気が変わる部分の鍵盤のタッチについて指導を受け、より力強く演奏を表現することができるようになりました。最後の終わり方について、繊細なタッチを求められて、最後の一音に至るまで集中力の続く演奏となりました。

（5）柴田　和奏さん　（小6）

「ソナチネ第7番　第1楽章 第2楽章 第3楽章」

左右の音量のバランスについて、第2楽章では4分の3拍子の強拍と弱拍の感じ方について、また第3楽章では繰り返し演奏される主題部分の音量の変化について指導を受け、メリハリをつけた表現ができるようになりました。

（6）松本実萌加 さん（中1）　「ため息」

フレーズの感じ方について説明があり、楽譜に書いてある音符分の長さをそのまま弾くのではなく、フレーズをどう揺らして演奏するかについて指導を受け、より流れのある演奏へと変わりました。

（7）尾﨑　澪さん　（中2）「K.545 第1と第3 楽章」

アクセントやスタッカートの付いた音符のアタックについて指導を受け、音楽のメリハリのついた演奏に変化しました。短調に転調した瞬間のアタックを付けることによって深みの増した演奏へと変わっていきました。

（8）原　啓馬さん　（中3）

「華麗なる大円舞曲」

ワルツの感じ方、左手のリズム打ちの強拍と弱拍の使い分けについて、また装飾音符の演奏についても触れられ、装飾の音符が強くなりすぎて本来必要な音が弱くなってしまわないように指導を受け、音楽の変化がみられました。

8名の指導を通して

伝えられていた強弱の表現の仕方や鍵盤のタッチ、また休符の感じ方について再度お話をされ、その後、模範演奏を披露してくださいました。

細かいパッセージの動きを、メリハリをつけて表現したり、強弱により音楽の雰囲気を明確に表したりするなど、世界トップレベルの演奏を子どもたちや来場者に伝えるように披露してくださいました。

なによりも、演奏しているプリンツ教授自身が、本当に楽しそうに演奏を行う様子を見られたことは、必ず子どもたちの今後の糧となると感じられました。

「最初は緊張していたけど、プリンツ先生の教え方がとても丁寧で、楽しくレッスンを受けられました。先生にアドバイスしていただいた部分をたくさん練習したいと思います」「音楽を通じ、国を越えて時間が共有できて嬉しかったです」といった出演者の感想からも分かるように、出演者だけでなく、来場いただいたすべての方々にとって、音楽の素晴らしさが伝わってくる本当に素敵な会となりました。

語らいの場

企業戦士が考える？ 令和時代の国際交流

徳田 潤

「徳田さん、一緒に写真撮ろう！」
良く知るアメリカ人女性に声をかけられ（もちろん英語ですが）、記念すべき人生初の自撮りをした写真。もともと自分自身が写真に写るのが好きでないので、ずっとスマホを持っていても自撮りをすることは無かったのですが、可愛いお嬢さんに誘われると断れませんね。

人生初の自撮りに一緒に映った可愛いお嬢さんは、お客様である研磨剤メーカーの開発責任者。ふだんはシカゴ近郊の研究所で働いています。アメリカはテキサス州で開催された国際会議に二人とも参加していて、会議の懇親会で一緒にお食事をした記念の写真。懇親会のノベルティであるバンダナをお揃いで身につけているので本当の仲良しさんみたいですよね(笑)。

私は、2012 年 3 月から 2019 年 12 月まで、ベルギーに親会社のある外資系化学会社「ソルベイ・スペシャルケム・ジャパン(SSCJ)株式会社」で、自動車の排気ガスを浄化する触媒材料や最先端の半導体加工に使われるナノ粒子の研究開発を担当しました。研究開発に関わる同僚達は、フランス、中国、アメリカに拠点があり、お客様は、アメリカ、韓国、中国、台湾、日本と国際色豊かです。

2019 年末に SSCJ を定年退職するにあたり、先に退職した元同僚達にも挨拶メールを送ったりしたのですが、思い出されるのは、赤ちゃんが生まれたばかりの上海にいるフランス人同僚に、アメリカ人上司が粉ミルクを大量に持ち込もうとしたら、税関で止められて「次はダメ」と見過ごしてもらった話など、ひとりひとりの思い出が去来します。

いつの時代になっても、一緒に仕事で苦労したとか、仕事の後の宴席で酔っ払い同僚をホテルの部屋から閉め出したとか、個人の繋がりが国際交流の最小単位ですね。

さて、人生初の自撮りを一緒に撮ったお嬢さんに定年退職の挨拶メールをお送りすると、現在妊娠中で 2 月に出産予定、との返事が返ってきました。例年、初詣は家族で中山寺に行くのですが、今年の初詣は彼女の安産祈願でしたね。

令和の交際交流について

春井 美保子

「いつでも、どこでも、誰にでも」道を歩いていて困っている人を見つけたら声を掛けます。相手が日本人ならば会話ができるので理由を聞いて助けることができます。それが日本語のわからない人ならばどうでしょうか？ そんな時に「どうされましたか？」「May I help you?」と声を掛けてあげていますか？ 見て見ぬふりをして通り過ぎてはいませんか？

英語ができないから外国語が分からないから時間がないからと理由は沢山ありますが、
中学・高校で習った英語の単語を駆使して（？！）声を掛けてみてはどうでしょうか？

英語が通じない方も多いので、必ずしもお役に立てるとは言えませんが、日本語でニコっと笑顔で声を掛けてあげてみて下さい。お役に立ちたいという気持ちは必ず通じます。

逆の立場を考えてみて下さい。道に迷った時に地元の方に「どうされましたか？」と気にかけてもらえたら、嬉しいですね。日本に来て良い印象を持って帰ってもらえると思います。

私はお節介なこともあってインドや台湾の方と知り合いになり、一度の出会いから楽しくお付き合いしています。国際交流というと難しく思いがちですが、「いつでも、どこでも、誰にでも」そして誰でも今から始められます！

おーい！　君達みんな　元気かい？

前田 芳一

1993 年 9 月、永年お世話になった港運会社を円満退職し、時の中国政府教育部の要請で私は広州市の中山大学（近代中国の国父・孫中山設立の名門校）で外国貿易論を講義することになった。文化大革命で荒廃したこの国が「開放改革」を旗印に自由主義諸国との貿易・交流をスタートさせ、我が国もこれに呼応して中国市場の開拓に積極的に乗り出した時期だった。在職当時私は上司の指示、また神戸市港湾局の依頼もあって北京、上海、天津、大連の 4 市を頻繁に訪れ、現地の貿易・港運企業や港湾局の責任者と接触していた。当時中国企業は国営、従って幹部は皆お役人、「前田、面白い男やなあ。こいつを連れて来て彼から自由貿易の要領や実務を吸収しよう」。私の大学教授任命も案外この辺から出てきたのかな？

1 年間何とか職責を果たした後、武漢大学、広東外語外貿大学（広州市）、中南民族大学（少数民族若手エリートの教育機関。武漢市）玉林師範大学（広西壮族自治区）などの国立大学からも特任教授として招かれた。貿易・港運論は中山大学だけ。他は大学側の要望もあって日本の伝統文化、現代日本経済がテーマ。私にも嬉しい講座だった。武漢大では、夏目漱石の「心」を教材として丸 1 年間学生たちと共に精読。清濁併せ呑む寛容さを持ち、広大な大地でのびのびと生きる隣国の若者たちに、「誠実」、「潔癖」を信念とし、時には生命さえ捨てるという我が国の厳しい国民性を理解してもらいたかったのだ。

その間、阪神淡路大震災では仁川の我が家も大被害を受けたが後始末は妻に任せ、私は 2008 年まで両国を往来しながら、教師としてかの地で正味 8 年間の単身生活。教え子達もよく付き合ってくれた！

その後私を頼って来日、留学を果たした教え子は十余人。その内わが母校神戸大学を選んだ 7 人（博士号取得 3 名、修士号取得 4 名）は、公費で来日卒業後即母校教師として帰国した一人を除いて全員卒業後もそのまま滞在、就職、結婚。さらに日本の永住権もしくは日本国籍を取得した。彼らは今も機会があれば家族連れでわが家を訪ねて来る。

他方、卒業後そのまま生国で働いている者、その後欧米諸国等に居を移して生計を立てている者、今は皆それぞれの世界で頑張っているようだが。何と、わが教え子たち、今もなお私のことは忘れていないようだ。時たまパソコンを開くと、結婚式や新婚旅行の嬉しい場面、抱きしめたいような愛児の笑顔など、沢山の写真・メールが飛び込んで来る！

イップ常子氏講演から「ウィーンが育んだ女性初のノーベル平和賞受賞のベルタ氏」

福家 清美

令和元年に宝塚市国際交流議員連盟との共同事業を兼ねて、ウィーン在住 45 年、オーストリア国家公認ガイドの資格を 2001 年に習得したイップ常子氏は、民族衣装をまとって講演しました。

ベルタさんは女性初のノーベル平和賞受賞者として、世界では広く知られていて尊敬されています。

お話はベルタさんのお母さんの紹介から始まりました。1843 年、25 歳で 50 歳年上のプラハの名門貴族であるキンスキー伯爵家の 75 歳の夫を亡くした時、6 歳の男の子とお腹の中に赤ちゃんがいました。その赤ちゃんがベルタさんです。お母さんはお城を出されて 3 人で暮らしますが、貧しいのでこんどは 34 歳年上の宮殿に住む男性と結婚して、お城で暮らします。ベルタは、あふれる蔵書に囲まれて、文化と教養を身につけ、五か国語を話せる女性に育ちます。30 歳の時ズットナー男爵家の家庭教師になります。その家の 22 歳の 3 男と恋仲になりますが、反対されて、秘書を募集していたノーベルの住むパリにいきます。五か国語で履歴書を書いた才能にノーベルは惹かれますが、22 歳の三男からの電報でふたたび二人はトビリシで暮らし始めます。1889 年ベルタはトリビシで見た戦争の光景を基に「武器を捨てよ」という反戦小説を発表、「平和友の会」を設立します。またノーベルに「平和に貢献した人を讃える賞を作ってはどうか？」と提案して、ベルタはノーベル平和賞の生みの親の一人です。1905 年、女性初のノーベル平和賞受賞者になりました。